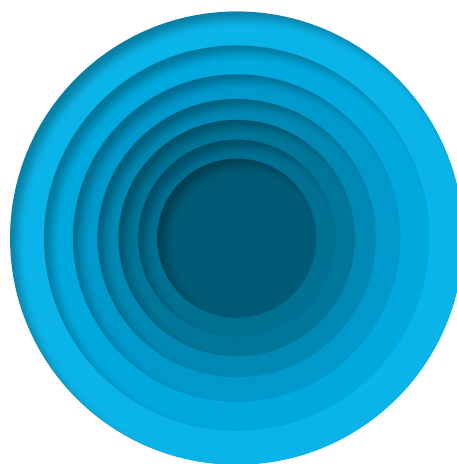




1,000人の生徒たちと
一緒に考えた
「これからのスマート
フォンセキュリティ」

Smartphone Security Workshop Report 2015

スマートフォンセキュリティ・
ワークショップレポート 2015

JSSEC×Re:inc

日本スマートフォンセキュリティ協会(JSSEC) 学生団体 Re:inc

Contents

02 **ごあいさつ**

私たちの活動について

03 **活動の目的**

「なぜ大学生によるワークショップを行うのか？」

05 **活動の内容**

「具体的にどのようなワークショップを行っているのか？」

07 **活動の結果**

「ワークショップに参加して、生徒たちはどう思ったのか？」

09 **アンケートレポート 2015**

参加した生徒たちのスマートフォンの利用状況

15 **まとめと考察**

17 **大学生の声**

19 **関係者の声・用語集**

21 **コラム**

ごあいさつ



一般社団法人日本スマートフォンセキュリティ協会
啓発事業部会 部会長

小池 勉 | TSUTOMU KOIKE

私ども一般社団法人日本スマートフォンセキュリティ協会（以下JSSEC）は2011年5月に発足し、ビジネス環境においてスマートフォンが安心、安全に活用されることを目的に約130社の企業が集まり結成された団体です。

また2013年からは、一般の生活者や子どもたちにも安心してスマートフォンを活用できる環境づくりをテーマに、啓発事業部会の活動がスタートしました。当初の活動としては、小中学校でのスマートフォン使用の実態やトラブルについて調査や、警察やセキュリティ教育を行っているIT企業を訪ね啓発活動の実態を把握することから始めました。

そこで分かったことはスマートフォンを児童、生徒たちが安全に使うための啓発活動は、量的にも質的にも追いついていないという現実でした。

そうした中で、四方教授（当時）を中心に慶應義塾大学で取り組まれていた小中高生向けのサイバーセキュリティ教育の出前講座が非常に効果的であることを知り、この活動をヒントにワークショップ形式の啓発活動を実施したいと考えました。大学生の皆さんも活動趣旨に共感し、学生団体Re:inc（リンク）を結成してくれました。

活動当初は大学生が高校生を対象に効果的なワークショップ実践してもらうためにJSSECとしてワークショップの方法や、セキュリティの基礎知識など様々な教育支援を行いました。

2015年2月に都立練馬高校で初めて「スマートフォンセキュリティ・ワークショップ」を行いました。大学生の皆さんの努力によって初回から成果を感じ、この活動への自信をメンバー全員が確信しました。ソーシャルメディアで起きる人間関係のトラブルなど同じようなことに悩んだ経験のある同じ世代のお兄さん、お姉さんの感覚や語りかけが非常に重要だったのです。つまり、日々変わるスマートフォンやインターネットを安全に使うための教育には「ジェネレーションギャップのない話し合い」が一つの答えでした。今後もモラルを教えるのではなく一緒に考えることを重視として普及啓発に努めてまいりたいと思います。

最後に、このプロジェクトに当初よりご協力、ご指導いただいた神奈川県警の皆様、また貴重な場をご提供いただいた学校の教職員の皆様に心から御礼を申し上げたいと思います。今後共皆様のご支援、ご協力いただけますようよろしくお願いいたします。



一般社団法人日本スマートフォンセキュリティ協会 (JSSEC)

スマートフォンは、企業の業務効率化、新しい事業基盤の中核ツールなどとしても大きな期待を寄せられています。

しかし、不適切な利用やセキュリティ上の不備などを警戒するあまり、有効活用への機会を逸することが危惧されています。

そのため、提供者だけではなく利用企業ならびに関連団体などが協調し、スマートフォンの安全な利活用を図り、普及を促進するために活動している団体です。



学生団体 Re:inc

大学生が主体となって活動しているボランティア団体です。

子どもたちに、インターネットやスマートフォンを利用する上で必要な知識やモラルを持ってもらうため、中学校や高校などでワークショップを行っています。

子どもたちと年齢や感覚に近い大学生だからこそできる、親しみやすい啓発活動を通じて、子どもたちのネットトラブルの減少・予防を目指します。

中高生の5人に1人が 「SNSで嫌な思いをしたことがある」ことを 知っていますか？

活動の目的

「ネットいじめ」に代表されるインターネットトラブルに巻き込まれる子どもたちを減少させ、スマートフォンをはじめとしたIT機器との「共生」の在り方を、大学生の立場から、保護者や教員の方とともに考える。

ワークショップの目的

活動を通じて、子どもたちが、

- ① インターネット、スマートフォンを利用するうえで求められているリテラシー能力を身につけるきっかけを生む。
- ② インターネットという「世界に開かれた空間」において発信・受信することで要求される「責任感」について考える。
- ③ インターネットやスマートフォンの利用に対する考え方の多様性について学び、理解する。

生徒たちのスマートフォン利用を取り巻く現状と課題、対策

現 状

「世界中の情報にアクセスして学習ができる」
「遠く離れてしまった友達とも簡単につながることができる」

スマートフォンの登場によって、そのようなことが子供たちにも簡単に実現できる時代がやってきました。しかし、便利なスマートフォンも、使い方によっては問題ももたらします。実際、子どもたちが「サイバー犯罪」や「いじめ」など大きな問題に巻き込まれる事件が後を絶ちません。

課 題

そのような問題を回避し、子どもたちが安心、安全にスマートフォンを利用できるようになるためには、3つの大きな課題があると私たちは考えています。

- ① スマートフォンのセキュリティ知識を持ち、サイバーセキュリティ教育ができる人材が圧倒的に不足しています。
- ② 新しいアプリ、SNSが次々と登場することにより、生徒たちの利用するコミュニケーションツールは数年で変化します。その結果、大人と生徒たちの間のジェネレーションギャップが発生し、生徒たちと同じ目線で問題を話し合うことが難しくなっています。
- ③ 急激に技術が進化する時代に「こうすればよい」「これはダメ」という、今ある答えを教える授業形式では対策が追いつきません。

対 策

具体的な 解決策

そのような課題に対し、私たちは下記の対策を考えました。

- 1** 一部の人たちがこの問題を考えるのではなく、より広い分野の人々が考え対策を行っていくことができるように啓発活動を行う。
- 2** 生徒たちと年齢に近い大学生と連携し、「ジェネレーションギャップのない話し合い」を行う。
- 3** 授業形式ではなく、「こういう場合、どうしたらよいか?」という「自ら考える力」を生徒たちに身につけてもらう教育プログラムを開発する。

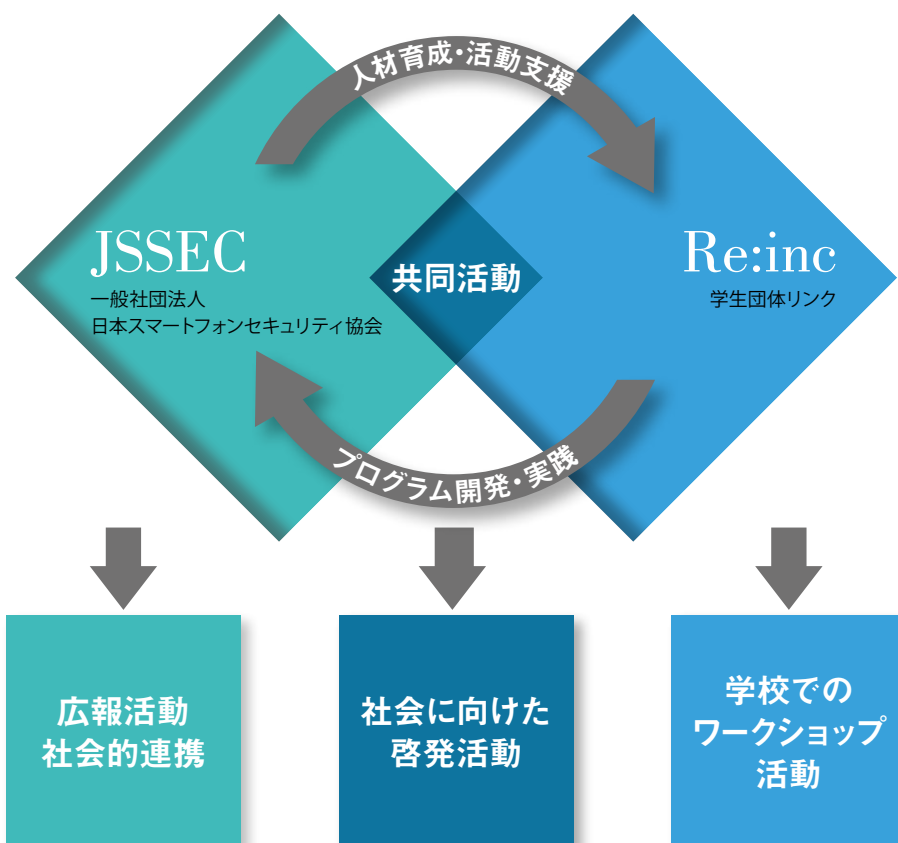
1 関係各者と連携した啓発活動

JSSECでは2013年から啓発事業部会を立ち上げ、教育分野の関係者、警察の関係者、企業などと協力してこの問題の啓発活動を行っています。

2 大学生と連携した教育プログラムの開発、実践

スマートフォンのセキュリティ知識が豊富なJSSECと、生徒たちと年齢や感覚に近い大学生の団体Re:incが協力し、「大学生と生徒たちが一緒に考えるセキュリティ・ワークショップ」を2015年春から開始いたしました。

2015年12月現在、5校約1,000名の生徒たちとワークショップを行い、この問題について生徒たちと一緒に考えてきた結果、約8割の生徒が「このワークショップがスマートフォンの正しい使い方を考えるきっかけになった」と答えています。





主な活動

- 小学校、中学校、高校などで、生徒たちを対象にしたセキュリティ・ワークショップの開催
- 親子を対象にしたセキュリティ・ワークショップの開催
- ITセキュリティ知識やファシリテーション能力の向上
- その他、サイバー防犯ボランティア活動

小学校、中学校、高校などで、生徒たちを対象にしたワークショップの流れ

1

事前準備

▶事前打ち合わせ

対象となる学校の担当の先生と、「生徒たちのスマートフォンの利用状況」、「ワークショップで特に話したいテーマ」などを事前に話し合う。また、団体内で当日の内容の議論やリハーサルを行う。リハーサルでは本番を意識し大学生内で司会役、グループのファシリテーター役、生徒役に分かれて実際の課題に取り組む。

▶事前アンケート

対象校の生徒に、スマートフォンやSNSの利用状況、過去のネットトラブルの有無、SNSに対してどのような印象を抱いているのかなどを事前にアンケートで回答してもらう。ワークショップのテーマや議論のポイントを選ぶ際の参考としている。

2

ワークショップ当日

導入

▶直前の打ち合わせ

本番の流れの確認（時間配分など）、変更点・注意点の確認、リハーサル

1 グループ分け

生徒：5～10名単位のグループに分かれる
Re:inc:各グループに1～2名（ファシリテーター）

2 Re:incの紹介

3 SNSの現状



4 お互いの自己紹介（グループごとに生徒が実施）

A4用紙に「名前」「趣味」「スマホを持ち始めた時期」「SNSのイメージ」を記入し、一人ひとり発表してもらう

5 シナリオの説明

6 グループディスカッション

●シナリオの課題をグループ皆で考える

- ・自分の意見を付せん紙に書いて模造紙に貼っていく
- ・「どうしてそういう意見なのか」を発表しながら、お互いの考えを分かち合う
- ・グループごとに意見をまとめる

シナリオ 例 1

6人の生徒が参加するSNSグループでAさんが既読無視している状況
課題1：Aさんはなぜ既読無視をするのか。
課題2：既読無視された人はどう感じるか。

シナリオ 例 2

BさんたちがAさんに対して悪口を言い始めた。
課題1：このあと、AさんやBさんたちにどのようなことが起こるか。



7 グループごとに発表

8 質疑応答

9 まとめ

- ・画面の向こうにいる人の気持ちを考える
- ・人それぞれ事情があり、SNSに関する考え方も違う
- ・一瞬の感情で行動してしまうと、取り返しのつかないことになる時がある
- ・つまり、SNSを扱う上では、「冷静な判断力」を身に付けることが必要



▶振り返りミーティング

活動に対する感想、反省を行い、よりよいワークショップに発展させる。また、報告書の作成などを行う。

▶事後アンケート

参加していただいた生徒に対して、今回の活動への満足度や理解度、活動に対する感想、学べたことを記述してもらう。今後の活動に役立てることを主な趣旨としている。

92%の生徒がワークショップに満足

大変満足 77%、満足 15%。
合わせて92%の生徒が満足と回答

楽しかった、面白かった	34 件
分かりやすい、勉強になった	16 件
他の人の考えが聞けた	11 件
LINEの危険等を知ることができた	6 件
大学生が説明してくれたから	4 件
考え直すきっかけになった	3 件
自分で考えることができた	3 件
新しい発見ができた	3 件

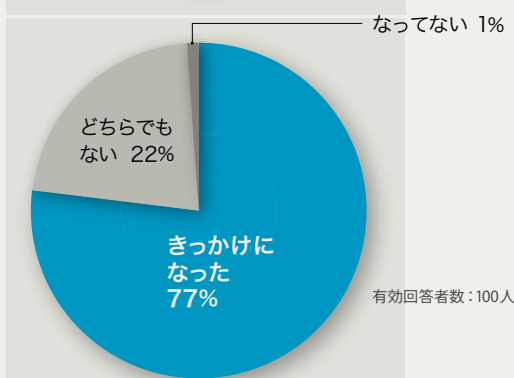
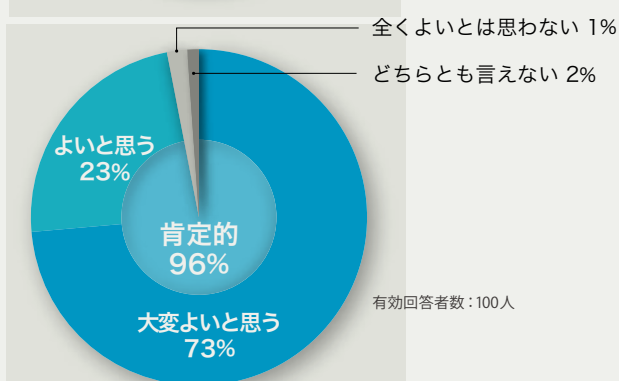
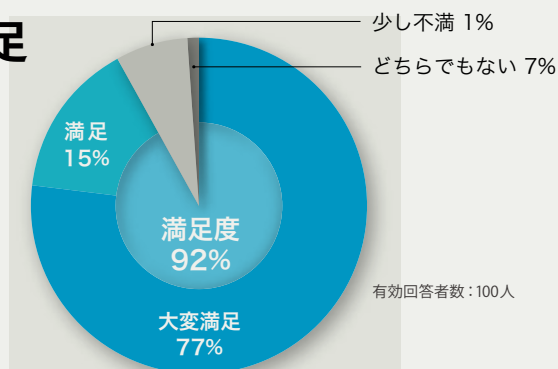
大学生ボランティアが中高生向けに
スマホワークショップを実施することについて

96%の生徒が大学生によるスマホ ワークショップを肯定的に評価

大変よいと思う73%、よいと思う23%。
合わせて96%の生徒が肯定的に評価

ワークショップはスマホの正しい使い方について
考えるきっかけとなったか

77%の生徒が 「きっかけとなった」と回答



「自分と歳の近い大学生とのワークショップだったので、とても楽しむことができました。ありがとうございました」（神奈川県私立高校1年生）

「ネット上でのトラブルは身近なもので他人ごとではないと実感しました」（東京都立中学校3年生）

「今回のワークショップで、スマホの使い方を考え直すことができて良かったです」（東京都立中学校3年生）

「今回、大学生の人たちに色々とお話をしてもらったので、新鮮でした。普段あまり考えないけれど身近なことなので良い経験になりました。ありがとうございました」（東京都立中学校2年生）

「ファシリテーターの方が、大学生だったので、とても身近な視点で考えることができました」（東京都立中学校2年生）

「歳が近い分、親に言われるより納得できる」（東京都立高校1年生男子）

「年代の近い大学生が教えてくれることで分かりやすかったです。TwitterやLINEなど使い方に気を付けます」（東京都立中学校3年生）

「私たちも、中学校や小学校で同じようなことをやりたいと思った」（神奈川県私立高校2年生）

生徒たちの言葉

高校生

山手学院高等学校

阿部 悠子 | YUKO ABE

ワークショップに
参加した生徒の声

大学生と対等に話し合う

私はこのワークショップを通して、様々な事を学びました。まず私が驚いた事は、私たちと年がいくつか離れているにも関わらず、同じ「サイバー犯罪」や「ネットいじめ」というテーマで対等に話し合えたことです。私ははじめ、大学生とワークショップなんて難しくてついていけないと思っていました。しかし、実際に話し合ってみると、大学生の方々の意見と私たちの意見は同じところがたくさんありました。これは、大学生の方々と私たちがサイバー犯罪やネットいじめに対して同じような意識を持っているという事ではないでしょうか？私はこのように年齢層が違っても同じ意識であるのは大切だと思いました。それと同時に、スマートフォン1台で簡単に犯罪に巻き込まれたり、いじめに繋がったりしてしまうことを改めて学びました。今後もこのワークショップで学んだことを生かし、サイバー犯罪やネットいじめに対する理解を深めていきたいです。

高校生

練馬高等学校

小倉 祐弥 | YUYA OGURA

ワークショップで本質に迫る

今回、私は、この授業を通してスマートフォンに潜む問題について考えを深めることと、共同学習の大切さを学ぶことができました。

私の学校でも、入学後にスマートフォンについての外部の方による講義や、集会や授業における指導はありましたが、先生方から生徒への一方向の情報発信だったため、説明などは理解していても、本質的な部分を聞き流し、深く考えることはしてきませんでした。

今回の授業は、そのような本質的な部分について、クラスメイトやサポートに入って下さった大学生とグループになり、与えられたスマートフォンに潜む問題を、グループで話し合いながら問題解決を図っていくため、グループ内の仲間がどう考えているかなどを知ることができたことと、問題を深く考えながら解決の方向へつなげていけることができました。さらに、サポートに入って下さった大学生の方は、私たちと年齢も近く話しやすかったことと、大学進学を目指す人たちにとっても刺激的な時間になりました。

今後も、このような授業をもっとやりたいと思いました。他の人の意見をグループ内で知れて、まとめたことを他のグループの仲間にも知ってもらえることは、将来にも生きてくると実感しました。ありがとうございました。

ワークショップを実施した
大学生の声

学生団体Re:inc

石川 果歩 | KAH O ISHIKAWA
(慶應義塾大学)

ワークショップに大きな影響を与える ファシリテーターとしての成長

私たち大学生のメンバーが、ワークショップで工夫する点の1つがファシリテートです。

なぜならRe:incが行うワークショップでは、一部の生徒から良い意見が出れば良いというものではなく、多くの生徒たちがそれぞれ意見を言葉に表し、みんなと共有することが大切だと考えているからです。そのために大事なものは、日頃から発言しない生徒でも参加しやすい状況を作り出すことであり、それはファシリテーターの力量にかかっています。

生徒たちの意見を引き出す為に、時間内での些細なコミュニケーションから、ディスカッションに参加しない生徒（自分のことに置き換えにくく、乗り気になりにくいスマホ非所持者を含め）を気にかけて、子ども達に気付いてほしい事を間接的に引き出しつつも自身で自分事として考える機会にしてもらいたいと考えています。

そうしたバランスの取り方は、経験していくうちに身に付くようになるもので、ワークショップを重ねるごとに力量の変化を実感しました。

▶ワークショップを最大限有効なものにする為に、生徒たちの意見をどう活かせばよいか？

▶意見が出ないとき、どう進めればよいか？

▶生徒が自発的に意見を出したり、まとめたりするのを誘発させる為にはどうしたらよいか？

ワークショップを重ねるごとにファシリテーション力の向上につながる発見があります。しかし、やってみて初めて分かるのですが、ファシリテートは大きな役割を担う上、難しく、最初は中々思った通りに進めません。そのため、ワークショップに参加した大学生のメンバーから「もっと技量を上げたい」という声が出ます。その為、経験を積むだけでなく、プロの方のファシリテーター養成講座を受けるなど、メンバー自身の能力向上にも励んでいます。

参加した生徒たちのスマートフォン利用状況

ワークショップのテーマや議論のポイントの選定をはじめとした活動の充実を目的に、事前アンケートを実施しています。事前アンケートでは、ワークショップ参加予定の生徒たちを対象に、スマートフォンやSNSの利用状況、過去のネットトラブルの有無、SNSに対してどのような印象を抱いているのかを聞いています。

ワークショップ 実施時期	2015年3月～11月
ワークショップ 実施校	計5校 ※東京都立高校1校、神奈川県立高校1校、神奈川県私立高校1校、東京都立中学校1校、神奈川県市立小学校1校
アンケート 実施方法	事前打ち合わせ時にワークショップ参加予定の生徒を対象に実施
回答数	745名（小学生280名を除く）
主な アンケート 項目	・ 使用している端末の種類 ・ 1日の携帯電話の利用時間 ・ 親子間利用ルールの設定有無 ・ 親子間利用ルールの内容 ・ SNS上での誹謗中傷の経験有無 ・ SNS上でのいじめ等の経験有無 ・ SNS等の利用状況 ・ SNS上で出会った人と連絡した結果 ・ SNS上で出会った人と実際に会った理由 ・ SNS上で出会った人と実際に会った結果

アンケート 1

使っている 端末

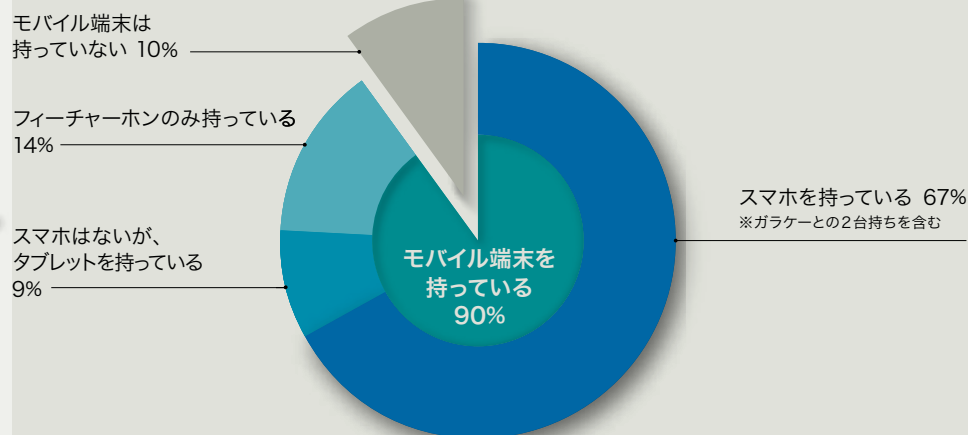
76%がスマホかタブレットを持っている

90%がモバイル端末を所持。

スマホかタブレットを持っているのは76%

大学生たち(Re:inc)の 一言コメント

- ・思ったより、スマートフォン利用者が少ない。
- ・タブレットのみの生徒が意外にいる。



有効回答者数: 745人

アンケート 2

利用状況

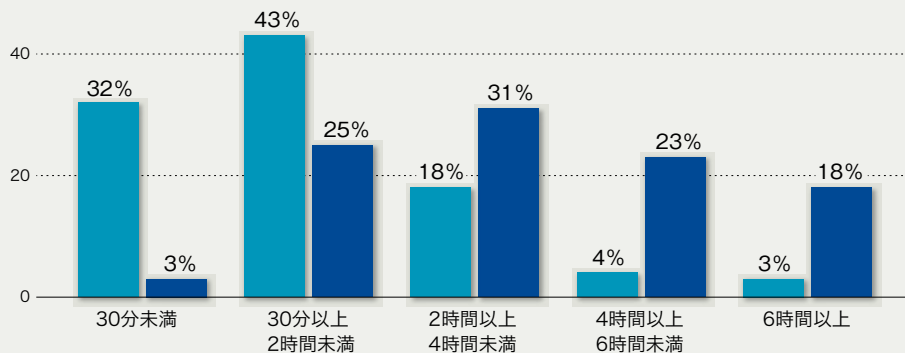
学年があがると利用時間も増加

中学生は75%が1日あたり2時間以内の利用。

高校生は72%が1日あたり2時間以上の利用。

1日あたりの使用時間

中学生 高校生



有効回答者数: 727人

アンケート 3

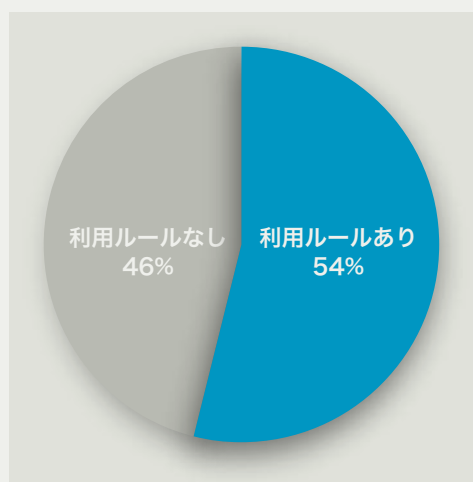
利用ルール

利用ルールを決めているのは約半分

携帯電話の利用ルールを設けている生徒は54%

大学生たち(Re:inc)の一言コメント

- ・自分が中高生のときは、親と利用ルールを決めることはしなかった。
- ・ルール決めは家庭でのことだけれども、地域や学校によってルール決めの状況は違うのではないかな。



有効回答者数: 715人

アンケート 4

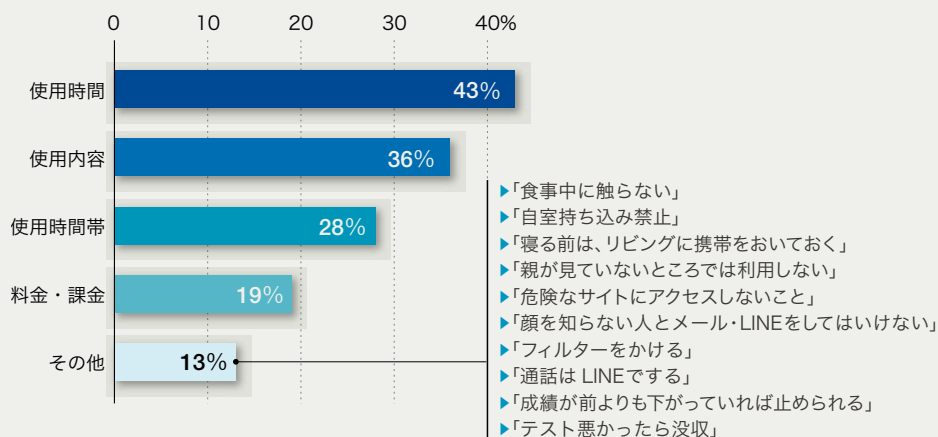
利用ルールの中身

使用時間帯や利用料金が多い

多いルールは「○時間以上は使用禁止」などの使用時間の制限や「Facebookは使用禁止」、「夜○時以降は使用禁止」など。

大学生たち(Re:inc)の一言コメント

- ・「使用時間」と回答した生徒が多いけれど、具体的には「何時間まで」の家庭が多いのか。
- ・SNSに関する利用ルールを設定している家庭が多い印象がある。



有効回答者数: 386人

アンケート 5

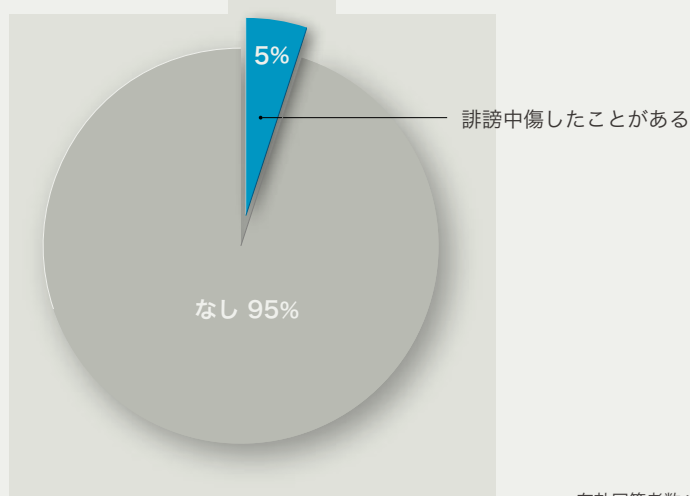
SNSで 誹謗中傷を したことが あるか

一部を除き多くの生徒が「なし」と回答

しかし、クラスに1、2名の割合で誹謗中傷する生徒がいる。

大学生たち(Re:inc)の 一言コメント

- ・誹謗中傷という意識はなくとも、SNS上で悪口を言ったことのある生徒は多いのではないかな。
- ・誹謗中傷が行われる場がネット内で多岐に渡っていることを考えると、この結果が一概に少ないとは言えないのではないかな。



有効回答者数：212人

アンケート 6

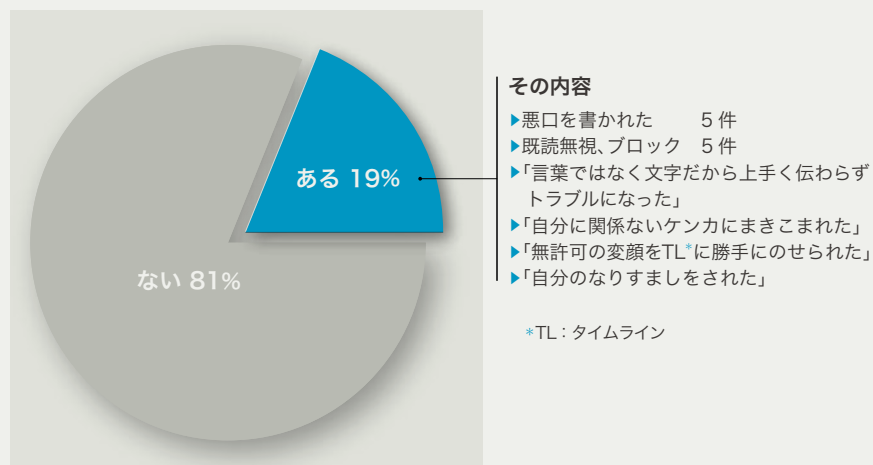
SNSで いやな思いを したことが あるか

約2割が「ある」と回答

悪口や既読無視などを中心に、いやな思いをしたことがある生徒が約2割。

大学生たち(Re:inc)の 一言コメント

- ・既読無視の捉え方は人それぞれ。想像していたより、既読無視をネガティブに捉える生徒は少ないと思った。
- ・「文字だから上手く伝わらずトラブル」というのは、多くの大学生も悩んでいると思う。



有効回答者数：101人

アンケート 7

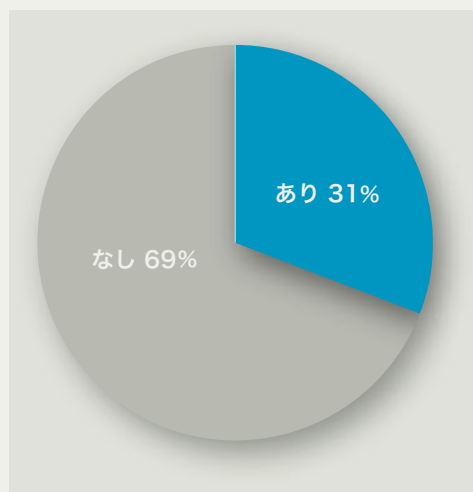
SNS等の利用

3割の生徒は連絡を取ったことがある

「現実世界で面識のない人と、SNSやLINEで人と連絡を取ったことがあるか」という問いに対し、3割の生徒がありと回答。

大学生たち(Re:inc)の一言コメント

- ・実際、3割以上いるのではないかな。
- ・「なし」と回答した生徒も、将来的に連絡を取る可能性があるのではないかな。



有効回答者数: 649人

アンケート 8

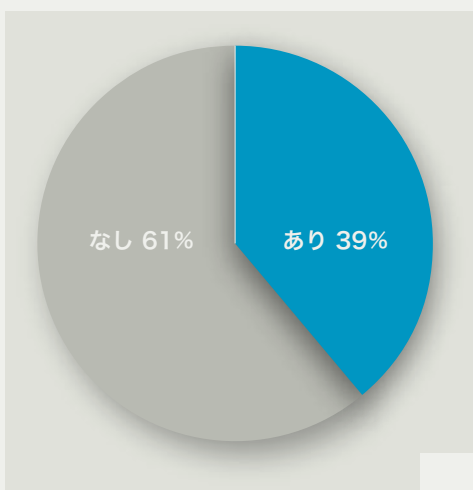
連絡した結果

連絡後、4割の生徒は相手と会ったことがある

前項で「あり」と答えた生徒のうち、「実際に会った事があるか」という問いに対し、約4割の生徒がありと回答。

大学生たち(Re:inc)の一言コメント

- ・予想していたより、会ったことがある生徒が多いと思った。
- ・このような子どもの行動を、保護者は把握しているのか。



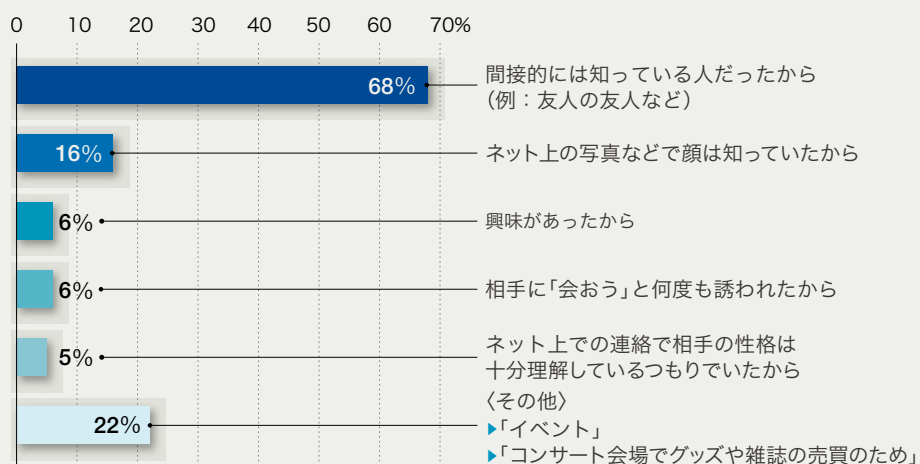
有効回答者数: 201人

アンケート 9

会った理由

間接的には知っている人だったから

理由はさまざまであるが、「間接的には知っている人だったから」という回答が約7割。



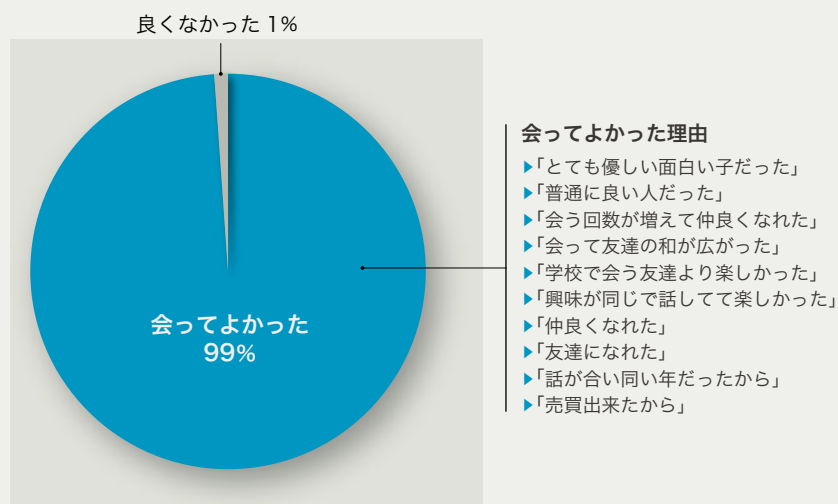
有効回答者数：79人

アンケート 10

会った結果

会ってよかった

会った結果、仲良くなって友達が増えたなど、ほとんどが「よかった」と回答。



会ってよかった理由

- ▶「とても優しい面白い子だった」
- ▶「普通に良い人だった」
- ▶「会う回数が増えて仲良くなれた」
- ▶「会って友達の和が広がった」
- ▶「学校で会う友達より楽しかった」
- ▶「興味が同じで話して楽しかった」
- ▶「仲良くなれた」
- ▶「友達になれた」
- ▶「話が合い同年だったから」
- ▶「売買出来たから」

有効回答者数：76人

アンケートから分かった 「生徒たちのスマートフォンの利用状況」

多くの生徒がスマートフォンもしくはタブレットを所有しているが、
利用ルールを定めているのは約半分

ワークショップをする前に学校側と協力で行ったアンケート結果からは、90%の中高生がスマートフォンもしくはタブレットを所有していることがわかりました。その利用に際しては、保護者との間にルール作りがなされていると答えたのは54%で、あまり家庭でのルール作りがなされていないことがわかりました。

SNSでいやな思いをしたことがある

約2割の生徒が、「悪口を書かれた」、「既読無視をされた」など、SNSでいやな思いをしたことがある。SNSが中高生の間で一般化したことで自覚的に被害者になってしまう生徒もいれば、無自覚のうちに加害者になってしまう生徒もいると考えることができます。

SNSで知り合った相手と「会ってよかった」

面識のない人物とSNSで連絡を取ったことがある生徒が3割です。そのうち、連絡後に実際に会ったことがあるのが4割。しかも会った結果、ほとんどの生徒が「会ってよかった」と回答しています。これは、中高生の子を持つ親世代にとって驚くべき結果であり、コミュニケーションツールの多様化、変化が出会いの変化にもつながっていることの一端を垣間見ることができます。

ワークショップで大学生に期待すること

事前アンケートでは、「ワークショップで大学生に期待すること」も聞いています。
自由記述のため、生徒たちが抱えているリアルな悩みが表れています。

1 正しいスマホの使い方を教えてほしい

一番多いのは、セキュリティリスクやトラブルなどに巻き込まれないために「何が良くて何がダメなのか？」を教えてほしい」という声です。

2 スマホ依存への対策を教えてほしい

意外に思うかもしれませんが、次に多い点は「スマホを見ていないと落ち着かない」、「中毒になってしまいそうで不安」といったスマホ依存への対策です。

3 スマホの便利な使い方を教えてほしい

電池の持ちを長くしたい、便利な機能などを教えてほしいという声も多いです。

4 スマホが身体に与える影響を教えてほしい

また、電波の影響や目の疲れについて不安に思っている声も多いです。

立場を越えた協働が生み出す対話

これまでに行ったワークショップにおいて、生徒たちから高い評価を得られた理由は、大きく分けて3点あると思います。

1つ目に、生徒たちと同様に、「デジタルネイティブ (Digital Natives)」と呼ばれ、保護者の方や教職員の方よりITに親しんでいる大学生だからこそ、生徒たちの目線にたった活動ができること。

2つ目に、保護者の方や教職員の方には相談しにくいネットトラブルの経験やインターネット、スマートフォンに係る悩みについて、「歳の近い」大学生だからこそ、素直に打ち明けることができる環境をつくることができたこと。

3つ目に、その重要性は認知されてきたものの、これまでなかなか生徒たちは考え、学習する機会がなかったインターネット、スマートフォンを利用する上で必要なリテラシー能力について学習する機会を提供できたこと。

また、「生徒たちの言葉」(p.7)、「ワークショップで大学生に期待すること」(p.15)にあるように、生徒たちと「歳の近い」私たち大学生だからこそ生み出せた成果に対する高い評価、そして、活動に対しての大きな期待をいただくことができました。しかしながら一方で、生徒たちと話をする中で、私たち大学生でも把握できていないネットトラブルの存在を知ったり、生徒たちがもつ知識は、時に私たち大学生でさえ追いついていないのではないかと感じたりする場面もありました。つまり、いわゆるジェネレーションギャップは、私たち大学生と中高生の間にも存在しているといえるでしょう。

ワークショップとは、「協働的な活動を通した学習や創造の場」のことです(「用語集」より)。これからも、大学生という視点を大事にしつつ、生徒はもちろんのこと、保護者の方や教職員の方とも協働し、インターネットやスマートフォンとの付き合い方、コミュニケーションの在り方について、考えていきたいと思います。



来年度のRe:incの活動目標

今年度のワークショップの経験をもとに、来年度は以下3つの目標を実現していきます。

- ❶ 親子向けワークショップ、教職員・生徒参加型ワークショップを充実させていきます。
- ❷ ワークショップを通じて、より生徒たちのインターネット、スマートフォン利用に伴うトラブルや悩みの実態を調査していきます。
- ❸ Re:incに参加してくれるメンバーを更に増やせるよう広報を強化していきます。

ワークショップの依頼や、活動への参加希望がありましたら是非ご連絡ください。これからもよろしくお願いします！



学生団体 Re:inc 代表

窪田 大悟 | DAIGO KUBOTA

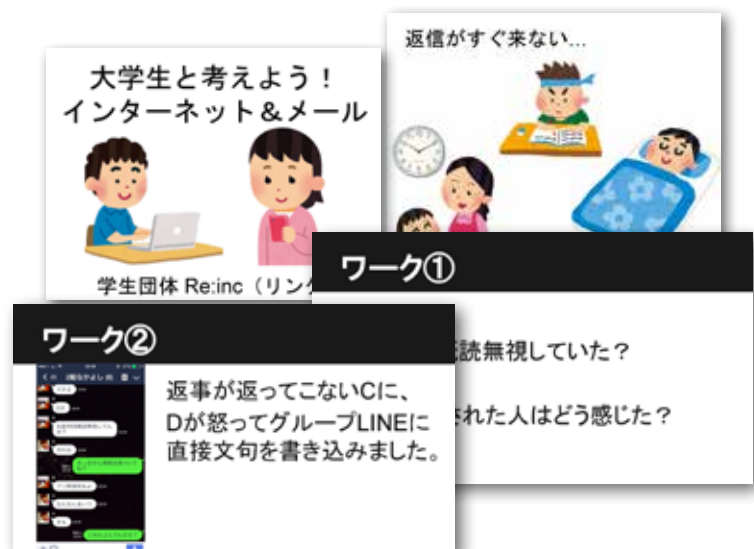
インターネットはとても便利なツールであり、無くてならない社会的インフラです。しかし、子どもたちの間でのSNSの利用から、深刻ないじめ問題になることがあります。また気軽な画像投稿により、子どもたちの予想を遥かに超える社会問題にまで発展したケースもあります。

そのような子どもたちの問題に対して、大学生でも何かできることがあるはずだという志のもと、さまざまな大学から学生が集まり、2014年にRe:incが誕生しました。

主な活動内容として、大人と子どもという上下の垂直的な関係性ではなく、大学生と小中高生といういわば斜めの関係性ならではの立場で、私たちはインターネットの利用について子どもたちと共に考え、話し合い、発表するワークショップを開催しています。加えて、私たちは小中高の学校でのワークショップを中心に、その他親子向けワークショップやさまざまなイベントにも参加してきました。これまでに私たちのワークショップを受けてくれた小中高生も1,000人を越えました。またワークショップの参加した生徒たちからアンケートを取り、小中高生のインターネット利用状況や意識調査・分析を行いました。

ワークショップでは、中高生同様SNSを頻繁に使う大学生だからこそ可能なコミュニケーションや新しい気づきが生まれています。子どもたちからは「大人とは違い身近に感じられて、しっかりとワークに取り組めた」「具体的なことについて相談できた」など、また保護者の方々からは「このような現状があるなんて知らなかった」「普段子供には聞けないことを学生に聞けて良かった」などの感想をいただきました。以上のようなワークショップでのやりがいを得られ、またJSSECと連携させていただくことで、活動を実施する側として私たち自身も情報リテラシーやセキュリティ知識を得ることができました。さらに、子どもたちとの関わりや不特定多数の人々の前で説明する経験などを通して、この活動は参加学生ひとり一人の成長にもつながると感じています。

私たちRe:incは学生ならではのインターネット利用におけるマナーの啓発の新たな形をこれからも提示し、他の学生団体とも繋がり、この活動を全国に広めていきたいと考えています。



ワークショップに使うスライド



学生団体Re:inc
鈴木 あい | AI SUZUKI
(東京大学)

サイバー防犯ボランティア活動における 大学生の意味

私がRe:incの活動に参加したのは、少しでもサイバー犯罪の被害に遭う児童生徒を減らしたいと思ったからです。私は以前から、自主防犯活動に関心を持っており、私自身も参加した経験があります。しかしながら、そのような活動への参加者の中に、若者が非常に少ないことを残念に思っていました。

インターネット、スマートフォンは、現代の子どもたちにとって、なくてはならない存在となっています。しかしながら、インターネットの世界は、保護者の目が届きにくく、また、日々技術が進化し続けることから、保護者や教員等大人の知識が追いついていないという現状があります。つまり、インターネットは、現代の子どもたちに対し、犯罪被害の蓋然性を高めるだけでなく、非行化の速度を速める可能性があるとと言えるでしょう。

このような背景から、サイバー防犯ボランティア活動においては、児童生徒と年齢が近く、児童生徒と同様に、インターネットが当たり前の生活をしてきた大学生の役割が、非常に大きいと考えます。今後、教員の皆様、保護者の皆様のご協力を頂きながら、大学生ならではの『視点』を大事に、活動に励んで参りたいと思います。



学生団体Re:inc
孫 可怡 | MIKI SUEN
(明治大学)

海外にも伝えていきたい

私にとってRe:incでの活動は、社会貢献活動の一つです。

スマートフォンの急速な普及に伴い発生する問題から、子どもを含めた家族全員の安全を守っていくために、インターネットを使用するうえでのルール作りは、非常に大切な「文化」になると考えます。

スマートフォンを使用するうえでのルール作りという文化は、日本のみならず、全世界においても必要な文化だと考えます。しかし、私の出身地である香港は、教育意識が高くても、家族の間で十分なコミュニケーションを行い、実際にルール作りを行う人は非常に少ないと思います。

これからも、Re:incのメンバーの1人として、日本でのサイバー防犯ボランティア活動に参加するだけでなく、これら日本での大学生による取り組みを、香港をはじめとした海外の友達にも広げていきたいと思っています。



学生団体Re:inc
野口 智紗樹 | CHISAKI NOGUCHI
(中央大学)

インターネットと日常生活 大学生がつなぐデジタル世代間のギャップ

私はRe:incのワークショップの特徴として、大学生が自ら経験をもとに問題を共有できる点、目線の近さから問題や課題を発見できる点が挙げられると考えます。

保護者や教員（大人世代）は、自身が子供の頃に、インターネットを利用していませんでした。しかしながら、デジタル世代である中高生たちと同様に、私たち大学生にとってインターネットは日常生活に密着した大変身近なものです。インターネットやスマホの利用について、大学生が中立的に仲介することで、規制と利用という世代間のギャップを埋める一助になれると考えます。

インターネットの普及は近年ますます著しく、私たちに多くの恩恵をもたらしています。一方で、インターネットによるさまざまなトラブルが横行しているという現状があります。このことは決して他人事ではなく、各々がインターネットに対する確立した知見を持ち合わせている必要があります。

子供たちに正しいインターネットの知識をもってもらうことで、インターネットを正しく活用するとともに、犯罪被害を防ぐことは、ひいては未来の安全を守ることに資することになるでしょう。



学生団体Re:inc
比嘉 さくら | SAKURA HIGA
(明治大学)

子ども達が自分で自分の身を守れるように

Re:incとは、子どもと大人のサイバー犯罪の認識の差を埋めて、子ども達がSNSを始めとしたインターネットを使う上でのモラルの形成を図る団体です。私がRe:incの活動に参加しようと思った理由は、大学生が子ども達と一緒に、実例を交えながらサイバー犯罪について考えることで、子どもたち自身に自分にも起こりうる身近な問題であるということ、認識してもらいたいという思いがあったからです。私は、Re:incでの活動を通じて、サイバー犯罪が起こりうる状況ができた時に、子どもたち自らが、自分たちの力（判断）で自分の身を守る能力を身につけてほしいと考えます。これまでのワークショップを通じて、大学生である私たち自身も、中高生たちのインターネットの利用の仕方や発想等を知ることができ、大変勉強になると実感しています。今後は、Re:incの活動を通じて、子どもたちだけでなく、保護者、大人へのアプローチもしていきたいと考えています。



元慶應義塾大学教授
(現警察庁長官官房国際課長)
四方 光 | KO SHIKATA



慶應義塾大学教授
(前警察庁長官官房参事官(サイバーセキュリティ担当))
岡部 正勝 | MASAKATSU OKABE

Re:inc 設立の経緯と今後への期待

Re:inc は、スマホやネットの危険な使い方等について、小中高校に出前講座を行うインターカレッジの学生団体です。私とRe:incの縁は、私がかつて慶應義塾大学湘南藤沢キャンパスに出向していた時代に遡ります。私は、出向前に警察庁情報技術犯罪対策課長、つまり警察のサイバー犯罪対策の責任者をさせていただいたのですが、インターネットを舞台として青少年が被害者にも加害者にもなる事件が既に数多く発生していました。

私は、このような事件を防止するためには、スマホやネットの安全な使い方に関する教育が重要であること、ネットの世界は技術進化のスピードが極端に速いことから、小中高校生に対する教育の主体としては世代が近く同種の媒体やコンテンツに親しんでいる大学生にも期待が持てること、さらには、警察や教育関係者だけでなく大学生のような一般のネットユーザーが犯罪対策や倫理の問題に自ら取り組む姿が世間に知られること自体が、ネットでは自由ばかりが大切で何をやっても許されるというような悪しき風潮を変化させる契機となるのではないかと考えていました。

このような時に、慶應SFCに出向する機会を得たので、学生諸君とともに小中高校に出前講座を行うサイバー防犯ボランティア活動を開始したのです。Re:inc は、その活動を慶應だけに留めず全国に普及させるべく、インターカレッジの団体として2015年春に発足したものです。まだまだ歴史の浅い団体ですが、多くの方々のご理解とご協力を得て、さらに発展していただきたいと願っています。

Re:inc の活動への期待

私は、2015年春まで、警察庁長官官房参事官として、警察のサイバーセキュリティ施策の取りまとめや調整の責任者を務めていました。そのときから、青少年を取り巻くサイバー環境の悪化と、子どもたちが被害者あるいは加害者としてかわかる犯罪やトラブルの増加を目の当たりにし、警察による取締り強化といった施策に先立つ問題として、子どもたちに対するリテラシー教育の必要性を痛感していました。

ただ、現状では、警察も、そしておそらくは教員の方々や保護者も、実際に子どもたちの心に十分届くような効果的なリテラシー教育を行うことは、残念ながら少し難しいように思われます。なぜなら、デジタル・ネイティブの子どもたちのほうが、日々進化するネット環境の知識やスキルという面では、大人たちよりもどんどん先に行っているからです。

そのようなジレンマを打破する意欲的な取組みのひとつが、子どもたちと同じデジタル・ネイティブ世代の大学生によるRe:incの活動だと思います。私は、慶應義塾大学において、前任者である四方光氏が立ち上げたサイバー防犯ボランティア研究会の活動を、引き続き主宰し実践しておりますが、どうしても、メンバー構成や活動時間などの面で、大学の正規の教育の一部であるがゆえの制約があるのも事実です。

その点、そのような制約を超えて、インターカレッジの枠組みで広く志ある若者を集め、事業者の方々とも協力してフレキシブルに活動するには、Re:incという団体の「かたち」は、まさに時宜を得たものであると思います。今後、Re:incが、草の根から、我が国の情報リテラシー教育をリードする存在となることを、心から期待しています。

用語集

▶ ネット

多くの場合、インターネットやインターネット上のサービスと、その利用のことを漠然と指す言葉。

▶ インターネット

さまざまなネットワークが相互に結びついた、全世界的なコンピューターネットワーク。「TCP/IP」という取り決めに基づいて情報が行き交う。

▶ コンピューター

もともとは、計算機。タッチパネルのような「入力装置」と「出力装置」、アプリを動かしたりする「演算装置」と「制御装置」、写真を保存したりする「記憶装置」などからなる。

▶ サイバー

ネットワークやコンピューターに関することであることを表す言葉。もともとは機械の自動制御のことを指す。

▶ 電子メール

インターネット上でやりとりされる手紙のこと。「メール」。

▶ SNS (ソーシャルネットワーキングサービス)

インターネット上の交流を通じて、人と人とのつながりを作るサービスのこと。

▶ LINE

日本で使われている代表的なSNS。

▶ Facebook

世界的に使われているSNS。実名とプロフィール写真を公開して利用することが一般的。

▶ タイムライン

利用者が投稿したメッセージを時系列に表示する画面のこと。

▶ 未読

届いたメッセージを受信者がまだ開封していない、あるいは、読んでいないこと。メールでは送信者にわからないが、SNSでは伝わるが多い。

▶ 既読

受信者がメッセージを開封したこと。既読になるのと同時に「読んでいる」とは限らない。

▶ 既読無視

メッセージを送った相手から返事がないこと。「無視」ではない可能性がある。

▶ ソーシャル疲れ

SNSの継続的な利用を、面倒に思ったり、疲れたり、利用頻度が下がったりすること。

▶ セキュリティ

何らかの危険から心身や財産を守り、安全な状態に保つこと。

▶ 情報セキュリティ

意図しない情報の漏えい、破壊、変更、認められないものによるアクセスなどがないようにすること。

▶ ワークショップ

協働的な活動を通した学習や創造の場。

▶ アクティブ・ラーニング

課題の発見と解決に向けて、主体的・協働的に学ぶこと、および、その手法。



東京都立練馬高等学校 情報科主幹教諭
正木 成昭 | NARUAKI MASAKI

キャリア教育、アクティブラーニングの 両視点を網羅する一つの“モデル”

現在、高等学校における教育の在り方として、“キャリア教育”と“アクティブ・ラーニング”という教育用語が注目されています。特に、アクティブ・ラーニングが今後の教育の柱とも言われています。

高校生の9割以上が所有している携帯電話・スマートフォン。中でもスマートフォンにおけるトラブルを、他者と考え適切にまとめて発表する授業を計画していく中で、幸運にもJSSEC、Re:incのお力をお借りしワークショップ（アクティブ・ラーニング型）の授業を実施することができました。

ワークショップを実施するに当たり、Re:incの学生が事前アンケートの実施、生徒の様子、授業での進め方などを対面式により十分に打ち合わせて下さり、さらに学生同士で授業の準備を遅くまで行っていたと聞き、大学生の啓発活動における前向きさが十分に伝わってきました。

Re:incのメンバーは大学生で、生徒と年齢も近く、課題における解決策の引き出し方、話術も計算されており、生徒の意見を上手くまとめながら誘導しているため、生徒が生き生きと真剣に取り組み、グループで課題を解決する手法を見出していました。

実際のワークショップでは、六つのグループに大学生が一人ずつ入りグループ内の高校生に意見を求めたりアドバイスを与える、いわゆるファシリテーターの役割を担い課題解決のための進行を行なって頂きました。その中で、大学生が生徒の意見一つひとつを大切に下さったり、認める・褒めることで多くの生徒のやる気に繋がっていました。このことこそ教育活動の重要なポイントであると思います。

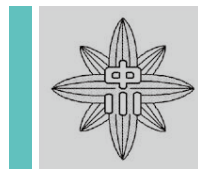
今回のワークショップを通し、キャリア教育、アクティブ・ラーニングの両視点を網羅する一つの“モデル”が確立できたと実感しています。今後も、JSSEC、Re:incのお力を借りながら、課題解決型のワークショップを展開していきたいと思っています。このような機会を与えて下さったJSSEC、Re:incの皆様には感謝致します。



山手学院中学校・高等学校 国語科 生活指導部長
小原 太美恵 | TAMIE OHARA

自分たち自身の問題として自ら考え、 教えあうことが大切

学校における生徒間トラブルのほとんどがスマホ、インターネット関連と言っても過言ではありません。本校も同じです。問題が起きた当初は、ひたすらトラブルを起こした生徒達の説諭と事態の収拾に終止していました。しかしそれでは問題は解決しません。まずは教員がSNSについて知識を持ち、子供たちの現状を理解すること、そして子供たち自身に知識を持たせ、どうすれば自分も他人も傷つけずにSNSを正しく、豊かに利用することができるのか、自分たちの頭で考えさせなければならぬと考えました。そこで、教員が講習を受け、全生徒に講習を施した後で全クラス・学年で話し合いを持たせて、「山手学院ソーシャルメディアポリシー」を作成させ、現在はそれに則ってスマホを使うようにさせています。その甲斐あってか、今年度になってSNS関連のトラブルはかなり減りました。やはり自分たち自身の問題として自分たちで考え、教えあうことが大切なのだと思います。その意味でRe:incさんの活動は大変意義深いものです。本校でもワークショップを行っていただきましたが、子供たちは年上の憧れの大学生達との意見交流に大変刺激を受けていました。この活動が今後とも全国へと広がっていくことを期待しております。



横浜市立中川小学校
本村 京子 | KYOKO MOTOMURA

インターネットの良さと危険性に気づく

現在、5年生の担任をしています。理由は様々ですが、三分の一ほどの子どもが自分で携帯をもっており、持っていない子どもでも親から借りて、メールやSNS、ゲームをしているようです。また、日常会話の中でも、SNSやスマートフォンの話が挙がります。一方、携帯もゲームも持っておらず、よく知らない子どももいます。今までは、情報教育としてマナーについて授業で取り上げると同時に、何かトラブルがあったときにそのことについて話すということをしていました。

今回のインターネット&メール講習では、5、6年生にとってまぶしい存在である大学生のみなさんが、インターネットの幅広い分野についてお話ししてくださったので、子どもたちも大変興味を持つことができました。さらに、プレゼンテーションに使われているイラストや文字、子どもたちへの話し方、また、クイズに赤白帽子を使うなど、大学生の皆様の熱意を感じました。子どもたちも興味をもちながら、インターネットの良さと危険性に気づけたと思います。ありがとうございました。

知らぬ間に高額請求？ アプリでの課金の際の注意点

亀岡 優輔 | YUSUKE KAMEOKA

スマートフォン（以下、スマホ）には多様なアプリケーション（以下、アプリ）をダウンロードすることで色々な機能が追加されます。そして、アプリの中には①ダウンロードも利用も無料のもの、②ダウンロードのみが有料のもの、③ダウンロードは無料だが、利用する時に有料もしくは課金をする必要があるものがあります。

スマホ所有者は、課金するか否かに問わず、この③に分類されるアプリを利用している場合がほとんどです。③のアプリの利用に際しては、特に子供たちが勝手に課金をしてしまい、後日大きな請求が保護者のもとに来るトラブルが多発しています。原因としては、保護者が子どもたちに課金できるように設定しているスマホを渡したり、子どもたちが勝手に保護者のクレジットカードを利用していることが挙げられます。

このようなことを避けるために、スマホ購入の際には勝手に課金を行えないように設定をしてもらい、クレジットカードは子どもたちが見つけにくいところに保管するなど保護者として子どもたちのスマホ利用に目を配ることが必要です。これを機に、保護者と子どもで今後の利用方法についてルール作りをしていくのはいかがでしょうか。

「サイバーセキュリティ 2015」からみる モラル教育の重要性

鈴木 あい | AI SUZUKI

2015年9月、サイバーセキュリティ政策に関する新たな国家戦略となる「サイバーセキュリティ戦略」が閣議決定し、その最初の年次計画「サイバーセキュリティ 2015」が発表されました。この「戦略」において注目したいのが、横断的施策のひとつである「人材の育成・確保」です。ここでは、産学連携による実践的な演習の機会の充実、初等中等教育段階からの教育の充実等をうたっています。

内閣府の調査によると、2013年のフィルタリング利用率は小中高校の全年代で55.2%と、前年の63.5%から減少しました。背景には、その多機能さゆえ、親世代の知識が追いついていない事情があるといえます。つまり、スマートフォン、インターネットは現代の子どもたちにとって不可欠な存在であり、時にその「知識」は教員や保護者を凌駕しているといえるでしょう。

このような背景から、初等中等教育、とりわけモラル面の教育においては、インターネットの存在が当たり前の生活をしてきた子どもたちと同じ目線に立った「教育（≠指導）」ができる学生ボランティアの役割は非常に大きいと考えます。近年、数値の面からみると、治安情勢は改善しつつありますが、それには自主防犯ボランティアによるパトロール活動等が寄与したといわれています。サイバー空間においても、市民の自主的取組みは重要であり、とりわけ子どもたちと年齢の近い大学生の役割は大きいのではないのでしょうか。

ソーシャルエンジニアリング

窪田 大悟 | DAIGO KUBOTA

情報セキュリティ対策と聞かれると、多くの人は技術的、物理的対応を思い浮かべるのではないのでしょうか。しかし、現在、スマートフォン等の情報機器端末の普及でIT利用というのは一般的なものになりつつあります。その中では、ITを扱う人間の行動的側面、心理的側面を逆手にとった「ソーシャルエンジニアリング」という脅威が生まれています。ソーシャルエンジニアリングとは、目的とする情報に対して技術的な攻撃を行いそのシステムに侵入するのではなく、人間の行動的側面・心理的側面を巧みに利用し、情報の取得・改ざん・破棄を受動的、能動的に実施させる手段のことです。例えば、オンラインゲーム上のトーク機能で見知らぬ人がアイテムなどの贈り物をくれて、親切な人だと思い込み、個人情報を聞かれた際にそれに答えてしまい悪用されてしまうことが一つとして挙げられます。また、話題にも上がったLINEのなりすましも信頼関係にある友達のアカウントであるから、金銭的要求でも受けようと思い被害にあってしまうケースも考えられます。このようにソーシャルエンジニアリングは、人間の特性でもあり脆弱性ともいえるところを狙われる、人間の無意識に付け込んだ危険な問題です。これらに対応するためには、いくら親切で信用できる相手であろうとも、急な個人情報の要求、金銭的要求に即答するのを踏みとどまり、果たしてその相手に情報を与えて良いのか、冷静に考えることが重要であると思います。

参考文献 内田勝也他「情報セキュリティ心理学の提案」情報セキュリティ大学院大学

サイバーセキュリティ人材確保の必要性

Re:inc OB S.O.

「サイバー攻撃」という言葉を聞いてどのような事態を思い浮かべるだろうか。

サイバー攻撃にはホームページの改ざん、政府や企業の機密情報・個人情報の不正入手などがあり、近年ニュースで耳にする人も少なくないだろう。

しかし実際の報道ではサイバー攻撃事案のみを紹介する為、そこからどんな影響が起こるかを市民は理解し得ない。サイバー攻撃を行うブラックハッカーはサイバー空間から不正アクセスをし、その過程で得た機密情報や個人情報を闇市場等で取引する。そうした情報が犯罪組織に悪用される危険性があるのだ。

そこで必要となってくるのが、サイバー攻撃による被害を最小限にとどめるサイバーセキュリティ人材の確保である。現在、官民が連携してサイバーセキュリティ人材の育成に力を入れているものの、その多くが情報を扱う職種に就いた人に一からセキュリティ教育を施

し育成していくというものである。しかし、それでは遅すぎる。1日に何万件と受けるサイバー攻撃に対して、情報を扱う仕事に就いてからになってから育成を開始するペースでは到底間に合わないのである。

そうした社会背景に学生団体Re:incの活動意義が存在する。Re:incは民間企業や警察と連携し、小中高生にセキュリティリテラシーやネットモラルの啓発を主に行っている。我々大学生はこの啓発活動のために、サイバーセキュリティの専門家から講習を受けメンバー自身の人材育成も図っている。これにより自身のセキュリティリテラシーが向上し、そして我々によって指導を受ける小中高生も若いうちからネットにおけるリスクやサイバー空間の問題について敏感になる。こうしたRe:incの活動により、社会人になる前からセキュリティリテラシーを有するものが生まれ、より身近になりつつあるサイバー攻撃に対応できる人材が確保できるのである。

テクノロジーと上手に付き合う

藤平 武巳 | TAKEMI FUJIHIRA

英語などの勉強はなるべく子どもが小さい時から学ばせたい!と前倒しに積極的な方は多いのではないのでしょうか?

しかし、スマートフォン等テクノロジーの勉強、活用はなるべく大きくなってから、と後倒しにするケースが多いのはなぜでしょうか?

その理由の1つに、テクノロジーは「テクノロジーと上手に付き合う方法」も合わせて学ばないと危険を伴ってしまうことがあるからだと考えています。しかしそれを学ぶのは簡単ではありません。なぜなら技術革新に伴って社会的感覚も変化するため、普遍的な対応マニュアル、教科書が作りにくいからだと考えられます。

私が社会的感覚の変化を感じた、ある生徒の印象的な表現があります。

「面と向かって電話しろ!」

言葉の使い方が間違っている点ではなく、コミュニケーションの感覚が40歳を超えた私とは違うんだ、という発見をしたことがとても印象的でした。そのように感覚が違う者同士ではなく、大学生と生徒という感覚が近い人たちが「テクノロジーと上手に付き合う方法」を考えるのがこの取り組みの1つの特徴だと思います。

しかし、それだけではテクノロジーの活用と言う点では足りません。教職員の方、警察の方、テクノロジーを開発している企業等多くの関係者と一緒になって、これからは「上手な活用」も視野に入れた取り組みに進化できればと考えています。

■ 編集後記

Re:inc との活動を通じて、JSSEC のメンバとして、職業としてコンピュータやインターネットに関わる技術者として、14歳と10歳の子どもの親として、思うこと、考えることの機会が増えました。

一方向の知識の伝達ではなく、参加者が体験しながら、協働して学んだり、創り出したりするワークショップにおいては、「ただひとつの正解」がないことに対して、多様な人々の対話を通して、「その時々々の納得解」を見い出していくことができるのだと再認識しました。

このレポートに書かれていることは、ある行動や意見にしか過ぎません。スマートフォンやネットを利用した人々のコミュニケーションやマナーに関する正解はありません。また、状況も時々も人々の考え方も変わっていきます。この冊子をお読みくださいました皆さまとともに、これからもさまざまな体験を通じた対話を重ねていくために、多様なご意見をいただきたく、どうぞよろしくお願いいたします。(栗田)

スマートフォンセキュリティ・ワークショップレポート 2015

一般社団法人日本スマートフォンセキュリティ協会(JSSEC)啓発事業部会、学生団体Re:inc

2016年3月12日発行

発行者: 一般社団法人日本スマートフォンセキュリティ協会(JSSEC)
文書番号: JSSEC-EN-RP20160312

© 2016 Japan Smartphone Security Association. © 2016 学生団体Re:inc. All rights reserved.

【本冊子の転用について】

本冊子に記載されている文章、図表を転用する際には、出典の表示をお願いします。

※出典表示の記載例

「スマートフォンセキュリティ・ワークショップレポート2015」
(一般社団法人 日本スマートフォンセキュリティ協会)

【お問い合わせについて】

本レポートに記載した事項に関するご質問、お問い合わせは、
<https://www.jssec.org/> までお寄せください。

【日本スマートフォンセキュリティ協会(JSSEC)啓発事業部会】

部会長:

小池 勉 (株式会社コンテンツブレイン)

副部会長:

矢追 秀行 (KDDI株式会社)

教育事業WGリーダー:

堀部 伸二 (NPO法人16歳の仕事塾)

唐沢 勇輔 (ソースネクスト株式会社)

栗田 太郎 (ソニー株式会社)

藤平 武巳 (NTTコミュニケーションズ株式会社)

藪内 祥司 (株式会社カスペルスキー)

山川 徹 (株式会社ブーメランイット・ジャパン)

【学生団体 Re:inc】

代表:

窪田 大悟 (中央大学)

副代表:

石川 果歩 (慶應義塾大学)

上野 剛幸 (慶應義塾大学)

亀岡 優輔 (慶應義塾大学)

佐久間彩夏 (中央大学)

鈴木 あい (東京大学)

孫 可怡 (明治大学)

新山 翔太 (明治大学)

野口智紗樹 (中央大学)

比嘉さくら (明治大学)

前田 翔伍 (明治大学)



<https://www.jssec.org/>



<http://reinc.info/>